

特定非営利活動法人 ワールド・ビジョン・ジャパン 2012年度 夏期募金による活動報告書

World Vision

この子を救う。未来を救う。

募金件数:9,051件

募金金額:62,500,732円

募金期間:2011年10月1日～2012年9月30日

皆さまにご協力いただきました夏期募金により、アフリカやアジアで、食糧や水の不足により栄養不良や感染症に苦しむ子どもたちや人々への支援を行うことができました。感謝とともに、ご報告させていただきます。

西アフリカ食糧危機

支援地域の状況

西アフリカのサヘル地帯の国々(ニジェール、マリ、ブルキナファソ、チャド、セネガル、モーリタニア)では、2012年1月頃から、約1,870万人が食糧不足に苦しんでおり、100万人以上の子どもが重度の急性栄養不良に陥る危険にさらされていました。この食糧危機は、度重なる干ばつ、慢性的な貧困、そして昨年比140%-150%といわれる食糧価格の高騰が原因であると言われています。

また、マリでは、軍のクーデターや反政府勢力との抗争による治安の悪化に伴い、39万人以上が、住む場所を離れて国内外に避難し、マリ国内や周辺国のモーリタニア、ニジェールなどの食糧危機はさらに深刻なものとなりました。

食糧危機は、人々の生活に深刻な影響をもたらします。栄養不良になると子どもたちは抵抗力が弱まり、病気にかかりやすくなってしまいます。また人々は食糧を求めて各地に移動するため、ニジェールだけでも約3万3千人の子どもたちが学校に通うことができなくなりました。

ワールド・ビジョンの活動

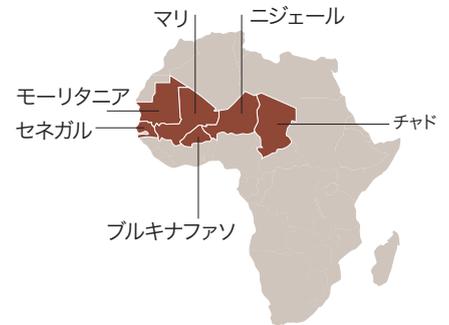
ワールド・ビジョン・ジャパン(以下、WVJ)は、国連世界食糧計画や他国のワールド・ビジョン(以下、WV)と協力して、とくに支援が必要な国々(ニジェール、マリ、チャド、モーリタニア、セネガル)で様々な支援を実施しました。

① 食糧配布

母子世帯や妊産婦、高齢者、障がい者、マリの難民、国内避難民など、最も脆弱な立場にいる人々を対象として食糧配布を行いました。例えば、マリのセゴウ地域、シカツ地域では、国内避難民や国内避難民を保護している世帯を含めた、とくに深刻な食糧不足に陥っている人々に食糧配布を行いました。多くの人々が現在も支援を必要としているため、今後も継続して支援活動を行います。

② フード・フォー・ワーク

人々が灌がい施設などのインフラ(産業や生活の基盤となる施設)を整備し、その労働の対価として食糧を受け取るフード・フォー・ワーク(Food For Work)プログラムを実施しました。フード・フォー・ワークにより、日々の食糧の必要を満たすだけでなく、人々によるインフラの改善によって長期的に食糧不足に対応する力をつけることを目指しています。支援は現在も継続中であり、徐々にインフラ整備が進んでいます。



WVから食糧を受け取る人々(マリ)

③ 栄養改善支援

栄養不良に陥っている乳幼児や妊婦、授乳中のお母さんを対象に、栄養改善支援を実施しました。とくに、子どもの状況が深刻な場合は、地域の病院で集中治療を行いました。また、中度の栄養不良に陥っている乳幼児を対象に2週間に一度、十分な栄養素を含む栄養治療食品を配布し、2カ月に一度、身長と体重を測定して乳幼児の栄養状態を確認しました。

さらに、栄養不良の妊産婦や授乳中のお母さんに対しても、栄養のバランスがとれた食糧を月に一度配布しました。現在も支援は継続中であり、例えばマリのセゴウ地域、シカツ地域では、栄養不良に陥っている約1万5千人の乳幼児と約5千人の妊産婦、授乳中のお母さんの栄養状態が改善するように支援しています。

④ 水・衛生改善支援

人々が安全な水を利用することができるように、水・衛生環境の改善のための支援を行いました。例えば、ニジェールのマリ難民キャンプでは、穴を掘削し、安全な水が得られるようになりました。また、不衛生になりがちな難民キャンプにおいて、手洗いの大切さなどを伝えることで、人々が衛生的な習慣を身につけるように働きかけました。



生活物資を受け取った子ども
(ニジェール)

⑤ 生活物資配布

衛生環境の改善には、感染症の蔓延を防ぐことも急務です。そこで、ニジェールにおいて、マリからきた難民が暮らす難民キャンプの人々に、水汲み用のバケツ、石鹼、浄水剤、衣服などの生活物資を配布しました。今後も、難民の人々の必要に応じて生活物資を配布する予定です。



支援により安全な水が使えるようになった女性たち(ニジェール)

担当者コメント:村松スタッフ

このたびの西アフリカ・サヘル地域の食糧危機は、1,800万人を超える人々が食糧不足に陥るといって、とても深刻なものでした。その深刻さにも関わらず、日本ではあまり報道されることがありませんでしたが、皆さまからの募金により、早い時期から子どもたちや難民などの最も支援を必要としている人々に支援を届けることができ、感謝します。2012年7月からは少しずつ雨も降り始め、食糧危機の状況は改善に向かいつつあります。WVは、短期的な解決策だけでなく、今後予想される干ばつなどにも対応できるように、長期的な視点に基づいた支援を行っています。

南スーダン

支援地域の状況

南スーダン共和国(南スーダン)アッパーナイル州マニョ郡では、内戦による施設の破壊により、多くの人々が、川や沼の水を飲料水や生活用水として利用せざるを得ません。安全な水が手に入る人は、人口の26%という状況です。また、地域でトイレの普及がほとんど進んでいないために、住民の多くが草むらなどで排泄し、衛生環境に悪影響を与えています。

校舎などの教育施設の不備も著しく、多くが泥やワラでできており、雨や風などですぐに崩れてしまいます。2011年7月の独立後、国境に近いマニョ郡にはスーダン共和国(北スーダン)からの帰還民が多く戻ってきており、支援を必要とする人々の数が増加しています。



ワールド・ビジョンの活動

マニョ郡では、地質的に地下水の塩分が高く、井戸の水が使用できないことから、安全な水を得ることができない人々が多くいます。WVはナイル川の水を浄水する装置を設置することで、安全な水を手に入れることができるように支援を行いました。また、住民自身が浄水装置の管理を行えるように、水管理委員会を設置し、人々が浄水装置周辺を清潔に保つこと、囲いなどを作って家畜などが浄水装置に近づかないように配慮することなど指導しました。

さらに、トイレの使用が感染症予防などの役割を果たしていることを伝え、トイレを設置するとともに、トイレを使用すること、食事

前には手を洗うこと、安全な水で食器を洗うことなど、衛生についての基礎的な知識を広めるための啓発も行いました。

子どもたちの多くが泥やワラでできた学校で勉強している現状を受けて、校舎の建築を行っています。また、PTAを設置することで、住民が自分たちで学校を運営、管理していくことができるように研修を行いました。



完成した浄水装置とWVJ佐々木スタッフ(南スーダン)

支援地は、北スーダンと国境を接する地域でもあり、2011年8月にはスタッフが銃撃戦に巻き込まれるなど、治安が不安定な中で、安全面に細心の注意を払いつつ、事業を続けてきました。流動的な治安状況ではありますが、一部活動は現在も継続して行っています。

浄水する前の水(左)と、浄水後の水(南スーダン)



学校運営、管理のためのPTAの研修を受けた人々(南スーダン)

担当者コメント: 國吉スタッフ

皆さまの温かい募金を通じて、自分たちの祖国へ戻る人々、彼らを受け入れる人々へ支援を届けることができ、感謝します。支援地を訪れると、とくに子どもたちの置かれている環境の過酷さに心が痛みます。私たちが行っているのは、住民の人々が自分たちで生きていくための環境を最低限整備するための支援です。この支援を通じて、子どもたちが安全な水を飲み、雨風で壊れたりしない学校で学び、日々を平安の中で生きていくことができる「当たり前」の生活を、少しでも支えていくことができればと願っています。今後も、WVは南スーダンでの活動を継続して行っています。

スリランカ

支援地域の状況

26年にも渡って続いたスリランカの内戦は、2009年5月によりやく終結を迎え、激戦で多くの犠牲者を出した北部州でも、ようやく人々が故郷の町や村へ帰還できるようになりました。しかし、故郷に戻っても、ほとんどの財産を失い、家も道路も学校も破壊され、田畑は荒れ果て、多くの帰還民が安定した生計を立てられず、日雇労働や人道支援団体からの食糧支援でその日暮らしをしています。最も困難な状態に置かれているのは、内戦で男性の働き手を失った家庭や小さな子どもの多い家庭、寡婦、障がい者や高齢者です。中でも寡婦世帯は全世帯の20%近くにもものぼり、生活苦につけこんだ性的搾取が深刻な問題になっていました。



スリランカ

ワールド・ビジョンの活動

WVJは内戦の被害が大きく、支援が行き届いていないキリノッチ県カラチ郡において、社会的に最も困難な中にある帰還民家庭が安定した収入を得て生活を再建することができるように、皆さまからの募金とジャパン・プラットフォームからの助成金により生計回復支援を実施しています。

カラチ郡における生計回復支援は、主に内戦の前に農業や家畜業で収入を得ていた世帯を、支援の対象としています。なかでも、とくに片親と子どもだけの世帯(多くは女性が世帯主)、扶養家数が多い世帯(扶養家族が4人以上)、障がい者を抱えた世帯(とくに働き手が障がいを持っている場合)、貧困世帯(1カ月の世帯収入が約2,500ルピー(約1,500円)以下)といった世帯であることを事業対象の条件としています。

こうして選ばれた支援対象の家庭242世帯が、それぞれの経験や状況に応じて、農業や畜産、縫製など最も適した手段を選択し、その活動に必要な物資を配布しました。

また、物資の配布だけでなく、配布後の活動が軌道に乗るよう、基礎的な会計の知識や計画の立て方、ビジネスの仕組みといった経営に関する必要な知識の研修も行い、438世帯が受講しました。その結果、支出の記録を取る習慣が身につくなど、多くの受講者が研修で学んだ内容を実践しています。

さらに人々が、問題の生じたときにサポートを得ることができるように、人々と住民組織や生産者団体、政府関係者との会合などを通じた関係の構築や強化の支援を行

いました。このような会合や、住民の組織に合計655世帯が参加し、その結果、活動や販売に必要な技術や知識を身に付け、より安定した生計活動ができるようになりました。

支援は今年の11月まで行われる予定で、今後さらに400世帯に対する生計支援物資の配布、114世帯を対象とした経営能力研修、286世帯を対象とした地方政府や住民組織との会合などを予定しています。

※ジャパン・プラットフォーム: NGO、経済界、政府の対等なパートナーシップのもと、世界各地で起こる地震などの自然災害、紛争などにより発生する人道危機に対して迅速かつ効果的な支援を行う団体です。



生計支援によりミシンと裁縫用機材を受け取った女性たち(スリランカ)



スリランカ駐在、岡崎スタッフからの現地レポート

住民説明会を行う岡崎スタッフ(スリランカ)

平和へと向かう現地の力

苦境の中にいる人々を助けたい—そんな想いから生まれる「支援」は、ほとんどの場合、純粋な「善意」からくるものです。しかし、「善意」から生まれた「支援」が、人々に思いがけない悪影響を及ぼすことがあります。例えば支援対象地域に2つの対立するグループがあり、片方のグループのみが支援を受けるとどうなるでしょうか。両グループの緊張は高まり、対立は深まるかもしれません。もし対立を和らげる方向で活動を計画できれば、地域の平和に貢献できる可能性があります。

WVJは、スリランカ北部での生計回復支援の支援対象地域で、紛争予防・平和構築に力を入れています。

WVJの生計回復支援は社会的に最も脆弱な立場に置かれた人々を対象にしていますが、実際にどの世帯に支援を行うかは、これまでWVJと村長、住民組織の代表が相談しながら決定していました。しかし、一般住民にしてみれば、「自分たちの知らないところで、支援団体と一部の人が勝手に決定している」という思いもあったようです。

住民は皆多かれ少なかれ、困窮した状態に置かれているので、支援対象に選ばれることを心待ちにしています。そのため、支援対象から外れた人が「えこひいきだ」と噂を流すこともありました。人々の間に分断や争いではなく、連帯と平和をもたらすにはどうすればよいか、考慮の末、支援対象世帯を選ぶプロセスに住民がもっと参加できるようにしました。

住民説明会の日、村長や住民組織の代表が、あらかじめ選んだ支援対象世帯を発表しました。村長が選ばれた支援対象者の名前を一つ一つ読み上げました。異議があれば誰でもその場で発言することができるので、時々、住民の中から声が上がりました。

「その家はトラクターを持ってるよ」

「それは買ったんじゃないかって借りてるんだよ。リース代がかかるから生活は苦しいんだ」

いくつかの議論が起こり、多くの住民が意見を述べ、それぞれに結論が出されました。そうして、一部の支援対象者が、別の対象者に置き換わりました。村長が最後の名前を発表した時、住民から一斉に「反対」の声が上がりました。

「彼女は他の団体から2回も支援を受けているよ。一度も支援を受けていない家があるんだから、それは不公平だよ」

「支援はたいてい女性が優先されるけど、男性だって同じように困ってるんだよ」

皆が口々に反対意見を述べ、その場は騒然としました。その波が少し収まった時、一人の女性がずっと立ち上がって言いました。「彼女が本当に苦しい状況なのは、みんな知ってるでしょ？もう一度、彼女にチャンスをあげてもいいと思う」

その場は水を打ったように静まり返りました。そして、やがて、「私もいいと思う」「賛成」という声があちこちから上がりました。

村長がみんなに問いかけます。「本当にみんな、彼女にこの機会をあげてもいいんだね？」今度は一斉に返事が返ってきました。「あげていい」。大半の女性たちからでした。男性たちも、反対の声を上げる人はいませんでした。

私はこの人々は公平さよりも、「自分たちにとって正しいと思えること」を選択したのだなと思いました。自分の利益を追求するより、自分より苦しい立場にいる人を助けることが大切なのだと、自分たちの地域をこういうものにしていくのだという住民の明確な意思表示を見た気がしました。

後日、その村を再び訪れ、住民から話を聞く機会がありました。「今まで自分が支援をもらうことばかり考えていて、誰が支援をもらうべきか、なんて考えたことがな

かった。一番困っている人たちが選ばれたからよかったと思う」という声が口々に返って来ました。

「こうして私たちの意見を聞いてくれたのは、WVJが初めてだった。この方法は一番いい方法だと思う。今度、行政や支援団体がやって来たら、この方法を提案してみるよ」と一人が言いました。

争いは人の心が生み出すものですが、同じ人の心は平和へと向かう力も生み出すことができます。その力を信じて、現地の人々に寄り添いながら、その力を引き出すきっかけを作り出すこともNGOの大切な役割なのだと、その日私は改めて心に刻みました。

※このレポートは、WVJホームページ(www.worldvision.jp)の「世界と日本をブログでつなぐ」にある、岡崎スタッフのブログ「平和へと向かう現地の力」(2012年8月29日掲載)から引用したものです。「世界と日本をブログでつなぐ」には、事業担当するスタッフの最新レポートが掲載していますので、ぜひご覧ください。



支援でヤギの配布を受けた家族(スリランカ)

●募金についての問い合わせ先 特定非営利活動法人 ワールド・ビジョン・ジャパン

〒164-0012 東京都中野区本町1-32-2 ハーモニータワー3F

TEL:03-5334-5351 FAX:03-5334-5359

Email:dservice@worldvision.or.jp

<http://www.worldvision.jp>

ワールド・ビジョンは、キリスト教精神に基づいて開発援助、緊急人道支援、アドボカシー(政府や市民への働きかけ)を行う国際NGOです